

# 農林水産大臣賞受賞

多彩なイベントを盛り込んだ棚田オーナー制によるむらづくり

受賞者 たなだ さと 棚田の郷かぶと

とちぎけんはがぐんもてぎまち  
(栃木県芳賀郡茂木町)

## ■ 地域の沿革と概要

茂木町は、栃木県の東南部に位置し、県都宇都宮市から東へ31kmの距離にあり、茨城県に隣接している。東西12km、南北27km、面積172.71平方キロメートルの南北に細長い町であり、町全体が八溝山系に含まれ、山林が64%を占めている。町の中心地区に全人口の半数近くが集中しており、他の住居地は山間の盆地または峡谷地、山腹にも点在する。気候は内陸性であり、積雪量は少ない。

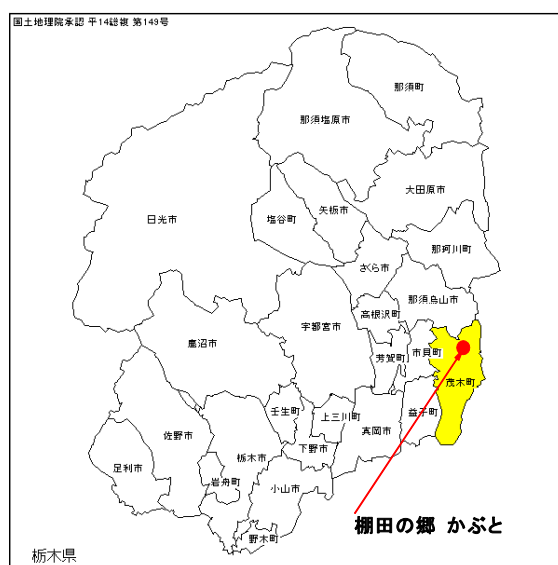
## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

任意団体「棚田の郷かぶと」が活動する山内甲（やまうちかぶと）地区を含む山内という地域は、茂木町の北東端、茨城県境の農村集落で、北は鷲子山塊の山なみに囲まれ、南は那珂川の河岸に臨む。山紫水明と言えるような日本の里山の原風景を残しており、茂木町の中でも景観の美しい地域といえる。産業は稲作を中心とした農業が主である。傾斜地を利用した棚田が四季折々の美しい景観にさらなる彩りを与えており、県の「残したい栃木の棚田21」に選ばれた「赤坂の棚田」などがある。豊富な栄養を含んだ山からの湧水を利用して作られる米は食味も良い。

文化面では、集落近くにそびえる松倉山頂に馬頭観音があり、集落で親しまれ祀ら

## 第1図 位置図



※ 白地図 KenMap の地図画像を編集

## 第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	集落
地区の性格	地縁的な集団等
農家率 (内訳)	69.4% 総世帯数 36戸 農家数 25戸
販売農家数 (内訳)	12戸 専業農家 3戸 1種兼農家 2戸 2種兼農家 7戸
主要作物 (農業産出額)	水稲 820(百万円) 野菜 260(百万円) ※茂木町全体の数字
農用地の状況 (内訳)	耕地計 9.0ha 田 4.6ha 畑 3.4ha 樹園地 1.0ha 耕地率 12.3% 農家一戸当たり農用地面積 0.4ha

れてきた。また、この地域では古くから「百堂念仏」と呼ばれる催しがあり、天明2年（1782）に、松倉山観音堂の入仏式に百堂念仏を奉納されたのが始まりであるとされている。2頭で行う獅子舞は、全国でも珍しく貴重な文化遺産で、今から約850年ほど前から行なわれていたという記録がある。昭和59年に町の無形文化財に、60年に県無形文化財に指定された。例年盆行事として上演されていたが、少子高齢化の影響により現在は休止中である。

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

#### ア 時代の変遷と崩れゆく地域社会

歴史的に中心産業であった農業については、茂木町の地形上、利用可能な面積が少ないため、総じて規模が零細であった。そのため、単位面積当りの高収益が期待された労働集約的な葉タバコの生産が、基幹的作物として行われていた。そして、それを原料とするたばこの製造販売が、明治時代以来の地場産業として発達した。また、山林では薪炭やまきの生産が行われていた。

しかし、昭和30年代の中期以降、日本経済は急速に工業化が進み、農業の機械化、家庭電化、そして自動車の普及という変化がこの地域の生産、生活にも直接的に影響を及ぼすこととなった。農業と工業の生産性の格差から、所得の格差が大きくなり、一戸当たりの所得を維持向上させるために、多くの農家が工業を中心とする他産業への就職を選択することとなった。一方、山林もエネルギー革命のために燃料材としての用途がほとんど失われていった。これらの産業構造、生活様式の変化に伴う農林業から他産業への人口移動は、本町においても著しく、過疎化現象を引き起こす結果となった。

前述したとおり、山内甲地区は日本の里山の原風景を残した山紫水明の地である。しかし、過疎化が進む茂木町の中では山内甲地区もその例外ではなく、農業の担い手の減少や高齢化が続いてきた。米の系統出荷もほとんど行われなくなり、自家消費されるものがほとんどとなった。古くから行われていた「百堂念仏」も子供がいなくなっていって行われなくなっていった。昔から山林や農道などの維持管理は集落が協力して行ってきたが、そのつながりもいつしか乏しくなり、美しい棚田も、耕作放棄地になっていったのである。

#### イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

##### ① 昔から根付いていた協力体制の復活

山内甲集落では、廃れゆく故郷の状況に危機感を抱き始めていた。そんな状況下で、平成12年度に国が導入した「中山間地域等直接支払制度」の農業生産活動を維持しながら農地等を保全するとの考え方は、この地域が抱えている問題解決につながると思われた。

この制度では集落内の協力により耕作放棄を防ぐなどの具体的な取組をまとめる必要があるため、盛んに話し合いを行うようになり、これが、失われかけていた地域の結びつきを取り戻し、力を合わせれば地域を活気づけられるのではないかという雰囲気を生みだした。そして集落協定を結び、「山内甲集落中山間地直接支払制度協議会」として取

組を始めた。水路・農道周辺の集落共同での草刈り、景観作物の作付、イノシシ食害を防ぐための電気柵の共同設置など、取組は多岐にわたった。

平成14年には、それらの取組の成果もあって、集落内の「赤坂の棚田」が「残したいとちぎの棚田21」に選ばれた。

この間、集落で農地の保全活動が続く中、地域の活性化の方策についても協議が盛んに行われるようになり、集落で新たな取組にチャレンジしようと、平成18年に山内甲地区の住民33名が参加し、むらづくり協議会として「棚田の郷かぶと（以下「かぶと」という。）」を立ち上げた。

## ② 産・官・学の連携で始まった棚田オーナー制度

これからの取組に関して役場とも積極的に相談を開始した。そこに、宇都宮大学農学部の中野淳・加藤弘二両准教授とその学生達も加わった。かぶとにおいて高まるむらづくりの機運を見て、それをさらに進めたいと協力を申し出てくれたのである。

こうして、地元住民、役場、大学という産官学の連携によるワークショップが始まった。

集落は積極的に学生を受け入れ、学生は地元農家でホームステイを行うなど地域の理解に努め、地元住民との信頼関係を深めた。



写真1 「棚田の郷かぶと」会員と棚田オーナーの方々

その中で、茂木町内の別地区（入郷）で取り組んでいる棚田オーナー制度が話題に上がった。棚田オーナー制度を核としたむらづくりに取り組むことが集落を一つにし、耕作放棄地の解消と集落の活性化を同時に実現することにつながると考えたのである。ちょうど、集落内には美しかったが今は耕作放棄地となり荒れていた「菅の沢の棚田」があった。地権者はかぶとの協議会員で、耕作を続けていくことが困難となり稲作を中止していた。かぶとの会長が棚田をオーナー制度のために使わせて欲しい旨を申し出ると、「景観を損なうばかりの棚田が地域のために貢献できるならば」と快く了承してくれた。そして地元住民による整備を開始した。

ここでも原田・加藤両准教授の学生たちは、1時間半の時間をかけて宇都宮から作業を手伝いにやってきた。集落に少なくなった若者たちとの共同作業は地元住民にとっても楽しいものだった。

そして、平成18年も終わりに近づいた頃、来年度のオーナー制度開始を目指し、オーナーを募集することになった。募集にあたっては、広告料を払って宣伝できるほど資金に余裕はなかったため、一般記事としてこの新しい取組を周知してくれるよう様々な新聞社に話題を提供した。その甲斐あって、地元栃木県の地方紙である下野新聞や真岡新聞がこの新しい取組に対して積極的に支援する姿勢を表明してくれたほか、読売新聞も協力してくれることとなった。また、茂木町役場もホームページ内にかぶとの紹介ページを創設しアピールした。

それらを経て、ついに平成19年4月、オーナー数19組が集まり、かぶとの棚田オーナー

一制度が始まったのである。

## ウ 現在に至るまでの経過

### ① 美しい集落作り、美しい棚田作り(中山間地域等直接支払制度の活用)

平成12年度からは、地元住民が力を合わせて荒廃しつつある集落を復活させようと「中山間地域等直接支払制度」を活用し、イノシシの食害防止のための電気柵の設置、非農家を含めた水路・農道周辺の維持管理、耕作放棄地対策のためのコスモスなどの景観作物の作付、農薬散布等農作業の共同化などに取り組んだ。

オーナー制度の実施が決まってからは、さらに活動が加速し、オーナーが不自由しないように「菅の沢の棚田」に交流の場となる東屋のほか、水道、トイレを作った。また、荒れていた交流の場周辺が山紫水明に合うようアジサイの植栽を行った。

### ② 地域の魅力のグレードアップ(農地・水・環境保全向上対策の活用)

かぶとのオーナー制度開始年である平成19年は、国が新たな補助事業として「農地・水・環境保全向上対策」を導入した年でもあった。このころ、集落には迎え入れることになるオーナーに少しでも地域を気に入ってもらいたいという意識が強くあった。景観整備や豊かな自然環境の保全活動に地域ぐるみで取り組むことのできるこの事業を導入することに対して意思の統一に時間はかからなかった。新たな組織、「山内甲農地・水・環境保全協議会」を発足。集落の更なるグレードアップのため、景観に配慮した農作物の作付け、おだ掛けや脱穀など伝統的農法の保全・実施、オーナーや地域住民の共同実施による生き物の生息状況の把握等に取り組んだ。

はるか昔には当たり前に行われていた集落での共同作業。失われかけていたそれは、こうして現代に蘇っていった。

### ③ 棚田オーナー制度に農村の魅力をつめこむ

棚田オーナー制度を始めるにあたり、様々なことが話し合われた。町内で先に棚田オーナー制度を行っていた入郷地区では年会費は1組3万円ということだったので、それに準じ、かぶとでも3万円と設定することにした。

しかし、入郷地区の「石畑の棚田」は全国棚田百選の一つに選ばれていることを考えると、同じ3万円という会費でオーナーになってもらう以上、オーナーに満足してもらえなければならない。そのために、自分たちが提



写真2 棚田オーナーによる田植えの様子

供できるサービスは何だろうか。宇都宮大学や役場職員を交えたワークショップで盛んに協議し、知恵を絞った。結果として考え出されたのは、稲作のみにとどまらない農村の魅力を活かすこと、そして、ささやかでも心の温もりを感じさせるおもてなしをすることだった。入郷地区のオーナーを見てもほとんどが都市部の住民だったため、稲作に限らず農村部の暮らしや伝統を盛り込めば必

ず喜んでくれるだろうと思ったからだ。

そうして、棚田のオーナー制度には田植えや稲刈りなどの稲作の他にもホテル観察会、ジャガイモ掘り、もちつき、竹を利用した流しそうめん、小川を利用した生き物調査など多彩なイベントを盛り込むことにした。お昼の時間には地区の女性たちが地元でとれた野菜がたっぷり入った味噌汁や漬物、もろこし団子などを振る舞い、オーナーを迎えた。

#### ④ 宇都宮大学「さとびと」サークルの誕生と連携

オーナー制開始当時の平成19年4月、オーナーの名簿の中に「加藤弘二」の名前があった。そう、かぶと立ち上げ当時から協力関係にあった宇都宮大学の2人の准教授を中心とする一団は、棚田のオーナーとしてこれ以降もかぶとの活動に協力することを表明してくれた。それからほとんど間を置かず、宇都宮大学に原田・加藤両准教授を顧問とした「さとびと」というサークルができた。これはかぶとの活動に協力してきた学生達をはじめ、農業や農村の活性化に意欲の高い学生たちが集まったサークルであった。2人の准教授が主導して取り組んできたむらづくり活動の支援は、いつしか学生たちにもその熱意が伝わり、自主的な活動を行うサークルにまで発展した。

次年度以降、サークルは「さとびと」という名で棚田のオーナーとなり、かぶとの活動に参加することとなった。そして、かぶとの活動には欠かせない存在になっていった。

### (2) むらづくりの推進体制

#### ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

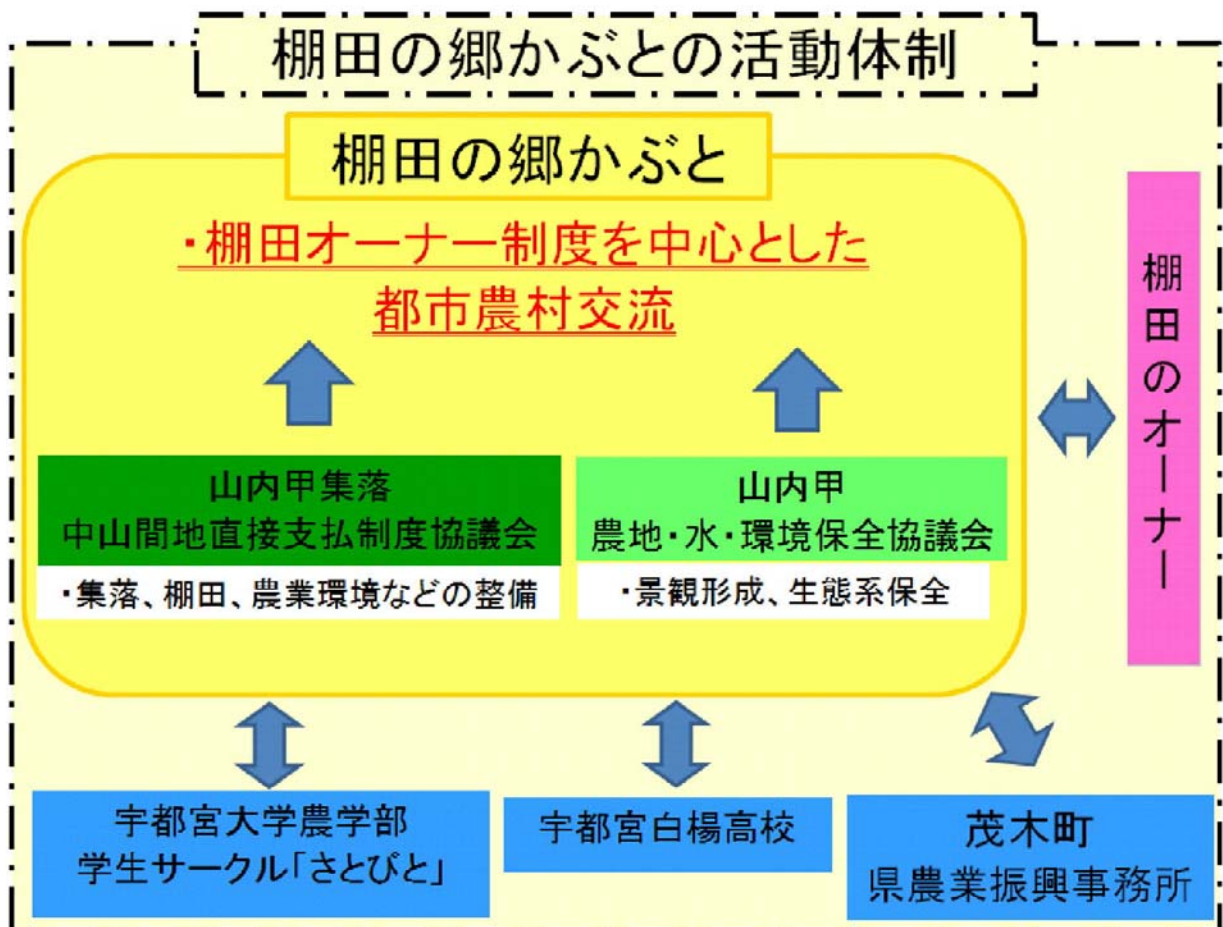
当協議会には山内甲集落のほぼ全戸の住民が参加しており、会長を中心として各種取組を展開している。国の補助事業である「中山間地域等直接支払制度」と「農地・水・環境保全向上対策」を利用するための組織を内包しており、集落の基盤整備やオーナー制度の体制整備を行っている。また、その2組織の代表には「棚田の郷かぶと」とは別の代表を置き、特定の人物に負担が偏らないようにしている。

#### イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

町からは、直接支払制度導入時期からアドバイスをもらい、棚田オーナー制度実施にあたっては多大な協力を得た。今でも棚田オーナー制度イベント時には集落を訪れ、写真撮影をしてくれるなど地域づくりを側面から支えてくれている。

宇都宮大学農学部には、専門家や現代の若者の視点で地元の人では気づかない地域資源やその利活用についてアドバイスをもらっている。また、同大学のサークル「さとびと」は冬になると山林の落ち葉さらいをいっしょに行うなど、集落の整備において連携しているほか、サークル自体が棚田のオーナーとなり、オーナー制度を支援している。さらに、集落側からは「さとびと」に小面積の畑を貸し出し、農業に興味を持っている「さとびと」の学生達に野菜作り体験の場を提供している。「さとびと」の学生達は定期的に訪れ、試行錯誤しながら野菜作りに励んでいる。

また、宇都宮白楊高校との連携のもとで棚田のファッションショーという独創的なイベントを開催しており、毎年各方面から注目を集めている。



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

(1) 地域を造り、人を作り、絆を創る

かぶとは、地域の活性化と集落の財産である農地や自然環境を荒廃から守るために組織された。立ち上がってから6年目、オーナー制度が始まってからまだ5年目であるが、その短い間に、集落内の結びつきは明らかに以前よりも強くなっている。

世代を超えた地域ぐるみの協力体制が出来ており、その中で積極的な取組を行うことで、集落外の多種多様な団体との連携につながった。これは、かぶとだからできることであり、集落内に生まれた強い絆が産み出した成果である。



写真3 棚田オーナーとの交流

かぶとでは、「交流は楽しい」と交流活動を非常に楽しみにしており、生きがいのように感じている者も多い。組織の立ち上げは、地域を造り、人を作り、人と人の絆を作り、

着実に地域に住む人の心を育みながらオーナー制度の取組へと発展させ、地域の活性化につなげている。

棚田オーナー制度を中心とした都市農村交流活動により、都市住民に農業と農村の価値や大切さを発信しつつ、この地域に目を向ける人々を増やしたい、より多くの人に来てもらいたいという地域の強い思いのもと、今後もさらなる活動の発展が期待できる地域といえる。

## (2) 連携が産み出す活力

かぶとの取組は地域内を守るだけでなく、都市住民、学生など、幅広い人々を通じた地域外との連携により新たな力を生み出し、さらには地域になくなりつつあった活気を取り戻すことができている。近い将来には、若い人々が集落に定着し、かつてこの地の伝統文化であった「百堂念仏」など、地域の宝である歴史や文化を復活し、次の世代に引き継いでいけるような真の活力ある集落を目指しており、地域をより良くしたいという思いや力は止まることを知らない。

地域の人々と、そして地域を訪れた人々と、未来永劫笑いあい、助けあいながら、本物の“豊かなむら”をつくっていきたいという思いがある。それができる人と豊かな自然が、今のかぶとには存在している。

## 2. むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

### (1) 棚田が結ぶ絆

平成19年、19人で始まった棚田のオーナー制度は、作業や盛り込んだ多彩なイベントがオーナーから好評を得て、順調にオーナー数を増やし、現在では30組前後で推移するまでになった。1組3万円の料金であるため、集落に約90万円の収益を生みだすようになっていく。さらに、平成23年2月、百年後にも誇れる美しく豊かな農村の伝統や景観などを認定する「とちぎのふるさと田園風景百選」にも認定された。景観を損なうばかりであった耕作放棄された棚田も、先人たちが築き上げた当時の真の姿を取り戻し、100年後にまで誇れる地域として認められるまで成長したのだ。

年の最初のイベント、オーナー説明会では「相変わらずお元気そうですね。」「今年もまたよろしくお願ひします。」といった声が飛び交っている。この棚田の郷に魅せられ、オーナーとなっているのは都市部の住民が多く、特に若い夫婦が子供たちを連れて参加するケースがとても多い。あるオーナーは「毎日食べているお米がどういうふうにつくられているのか、ちゃんと子供に教えたい」と話していた。

また、豊富な栄養を含んだ山からの湧水を利用して作られる米は食味も良いと好評を得ている。それらの証拠として平成22年度のオーナーの内、昨年度以前から継続してオーナーになっている方が6割ほどおり、地域の魅力は確実に伝わっているようだ。地域住民にとっても、集落に少なくなった若者や子供たちとの触れ合いが増えたことが刺激となり、さらなるむらづくりへの意欲は高まっている。

オーナー制度が始まってまだ5年目。少しずつだが、都市とこの小さな農村を結ぶ絆は生まれ始めている。現在、棚田には老若男女の笑顔が溢れている。

## (2) 若き力と共に

平成22年度も終わりに近い、2月13日。棚田の郷かぶとと宇都宮大学のサークル「さとびと」によるワークショップが行われていた。さとびとの青年たちが、甲地区で借りている畑で行った今年度の野菜作りについてプレゼンテーションを行った。それについてかぶとの住民たちがアドバイスする。その野菜はもっと手間をかけないといけない、肥料はこうでなければいけない、など。

そのとき、さとびとの青年の一人が口を開いてこういった。

「実は僕、来年度1年間は大学を休学して農業を学びに行くことにしました。」

かぶとの住民たちはみな驚いたが、彼によるとNPOが行っている事業で、農家のもとで農業について学ぶプログラムに応募したところ、滋賀で農業について学ぶことができることになったということだ。「皆さんと一緒に活動する中で農業に対する気持ちが変わりました。自分ももっと本格的に農業を学んでみたい、やってみたいと思うようになったんです。」それを聞いた、かぶとの人々は「大変だぞー。」「卒業が1年遅れちゃうなー。」などと茶化していたが、皆、とても嬉しそうだった。自分たちの地域を守りたい、先人たちが築き上げた農地を守りたいとの思いは、若者の心に農業の大切さや素晴らしさを伝えていたのだった。かぶとの活動は決して自分たちの地域のためだけのものではなく、若者の心も育てていた。

かぶとの温かさは若者たちの心にもしっかりと届いている。これからも若者たちを温かく迎え入れ、共に成長していける、未来の担い手を育てる関係を築いていこうと集落の誰もが感じている。

## 3. むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

### (1) かぶとの魅力を全国へ!!棚田に舞う妖精たち!! (宇都宮白楊高校との連携)

栃木県立宇都宮白楊高校は、明治28年に農学校として設立された歴史ある高校である。

茂木町出身・在住であり、同校に務める教師である平賀孝幸教諭は、平成19年度に山内甲地区で始まった棚田オーナー制度のうわさを聞きつけた。彼は、自らの生まれ育った地域を盛り上げ、何か少しでも役に立つことができないうかど以前から考えており、ようやくその機会に巡り会えたと思った。彼は早速、役場を通してかぶとの会議に参加し、棚田でファッションショーをやってみないかという企画を持ちかけた。



写真4 棚田ファッションショー

白楊高校でファッションのデザインについて学ぶ生徒たちにとっては自分たちが日頃学んでいる成果を発表する場になる、それと同時に、棚田でのファッションショーという斬新な発想は成功すれば確実に注目されるであろうし、地域のPRにはうってつけであると考えたのだ。全国の農村部で様々なむらづくり活動が行われている中で、何か自分たちの活動を印象づけるような特徴的な取組ができないだろうかと考えていたかぶとの

小林会長をはじめ、集落の誰もが喜んだ。何度か話し合いを重ね、平成20年度の棚田オーナー制で6月に行われる草刈りの日にこのイベントを盛り込むことになった。

当日、生徒たちが和服やドレスを身に纏い、音楽に合わせて、自然の中で華やかに舞う姿は他では見ることのできない美しい光景であった。棚田のオーナーの他にもたくさんの人達が見物に訪れた。平成21年度は竹を用いて小さなステージを作った。平成22年度には地域の子供たちも衣装をまとった。

棚田のファッションショーは、その斬新さから各方面で注目を浴び、その模様が下野新聞やとちぎテレビ、さらに22年度にはNHKのニュースにもとりあげられて全国に発信された。今では山奥の小さな集落の棚田に300名以上が集うという都市農村交流が展開され、地域の情報発信において重要な役割をもつ集落挙げての1大イベントとして定着した。

集落の住民からは「このときばかりは昔の、もっと人が大勢いて賑やかだったころの集落に戻るかのようだ。」「いや、それ以上かもしれない。」という声も聞こえてくる。

毎年、きらびやかな妖精たちが棚田に舞い降りるのを、老いも若きも楽しみにしている。

## (2) かぶとを支える女性の底力

かぶとの運営には女性も積極的に参加しているのが特徴だ。オーナーの農作業の後の昼食時には、集落の女性たちが季節の野菜をふんだんに使った味噌汁、漬物や煮物などを作って地元ならではの味覚をオーナーに振る舞っており、非常に好評である。都会ではなかなか食べる機会の少ないであろう伝統的な料理もあり、その珍しさからも興味を引くようだ。特に、雑穀のもろこしを使ったもろこし団子は素朴な味がかえって新鮮で美味しいと評判だ。女性たちの中からは「豪華な料理を作っているわけではないのにとっても喜んでくれるのでうれしい。」といった声が聞かれる。オーナーからの素直な反応が、女性たちの意欲的な活動の原動力となっている。

## (3) コミュニティの結束力の強化

「中山間地域等直接支払制度」を利用し、景観作物の植え付けなどを行ったことから耕作放棄地は減少し、集落の美化に成功した。また、この制度を利用するには集落単位で耕作放棄を防ぐための具体的な取組をまとめる必要があるため、その話し合いや共同作業の積み重ねが地域社会のつながりをより強くすることになった。今までにはなかった世代間の交流も生まれ、力を合わせれば地域を活気づけられるという雰囲気できた。

この集落全体の結束力の強化によって、棚田オーナー制度の実施やホテル鑑賞会、じゃがいも掘り体験など、集落内の新たな取組の発展へと突き進んで行くことができていく。

## (4) 将来に向かって

平成23年4月24日、かぶとは新たに菅の沢の棚田周辺にゆずの苗木を植え付けた。茂木町ではゆずの生産量が多く、特産品化が進められており、この動きにかぶとは積極的に協力していくことにした。かぶとの中にも畑でゆずを生産していた者が何人かおり、かぶと全体で協力しあえば、ゆずの生産を拡大し、町が取り組むゆず新商品の開発・販

売の促進に貢献していくことができると考えたのだ。さらに、「とちぎのふるさと田園風景百選」に認定されたことで、景観を地域資源の一つとして活用する機運が生まれ、「ゆず」を景観としても活用しようと考えている。棚田の周辺にゆずを植えることで、鮮やかな黄色の実と棚田とのコントラストによる美しい景観をつくり、グレードアップされた集落の魅力をより多くの人に伝えることで来訪者を増加させることが狙いである。

かぶとは今、地域の良さをより多くの人に知ってもらいたい、地域の魅力を感じてもらいたいという思いで、活動を展開している。オーナー制度に取り組み始めてから、地域には少なくなってしまう若い人たちが来るようになり、地域が元気になった。その若者が、オーナーが、いつかかぶとに魅力を感じ定住してくれる、子どもを連れて毎年訪れてくれるようにという思いでオーナーの取組を拡大させようと日々活動に励んでいる。今後もより多くのオーナーが地域を訪れ、活性化することを願い、着々と時を重ねている。